

「天の八衢」とは何か

一付：勝俣隆氏の「天の八衢」の理解をめぐる一

菊地照夫（法政大学）

はじめに

- ・古事記・日本書紀の神話（記紀神話）の世界観
 - …天上（高天原）⇔地上（葦原中国）を基軸とする垂直的他界観
- ・古事記ではこの間に「天の八衢」が存在する（日本書紀には「天八達之衢」）
 - =あめのやちまた

◎古事記の天孫降臨の段

爾くして日子番能邇邇芸命の天降らむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神、是に有り。故爾くして、天照大御神・高木神の命以て、天宇受賣神に詔ひしく、「汝は、手弱女人に有れども、いむかふ神と面勝つ神ぞ。故、専ら汝は往きて問はまくは、『吾が御子の天降らむとする道に、誰ぞ如此して居る。』ととへ」とのりたまひき。故、問ひ賜ひし時に、答へて白ししく、「僕は国神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神の御子天降る坐すと聞きつる故に、御前に仕へ奉らむとして、参る向へて侍り」とまをしき。

- ・ホノニギが天降りしようとしている時、高天原から葦原中国へとニギが「天降らむとする道」の途中の「天の八衢」に、上は高天原を、下は葦原中国を照らす神がいる
- ・アマテラスとタカギの神（タカミムスヒ）がアメノウズメに命じて尋問に行かせる
- ・その神は国つ神サルタヒコで、天つ神の御子が天降りますことを聞いて、御前に奉仕しようとお迎えしていたという

○「天の八衢」とは

- ・この場面の舞台…高天原から葦原中国に通じる道の中に位置する「天の八衢」
- ・衢=チマタ…チ（道）+マタ（俣）、道の分岐点、交差点
 - 八衢（やちまた）=多くの道の分岐点
- ・道…チ（霊）・イツ（威）の通路
 - 道俣（チマタ）…霊威がどちらに進むか迷ったり、進むべき道を誤ったり、はたまた霊威同士が衝突したりという不安・混乱・危険が発生しやすい。
 - そのためチマタは占いや祭祀の場となる

○問題の所在

「天の八衢」とは、どのようなチマタか
高天原と葦原中国の間になぜチマタが存在するのか
なぜそこにサルタヒコが出現したのか

(1)王権神話の二元構造

- ・考察の前提として、溝口睦子の王権神話の二元構造論
 - 古事記・日本書紀の神話…本来二元的に存在していた王権神話を一元化したもの
 - 日本古代の王権神話…アマテラス系の神話群とタカミムスヒ系の神話群が別個に存在
 - 本来の王権最高神はタカミムスヒ
 - ・アマテラス系神話群＝イザナキ・アマテラス・スサノオ・オオナムチの神話
 - ・アマテラス系のテーマ
 - …国土、万物の創造
 - …現世である葦原中国と他界（黄泉国、高天原、根国）との関係
 - …それぞれの世界の主神→高天原：アマテラス、葦原中国：オオナムチ、
黄泉国：イザナミ、根国：スサノオ
 - ・タカミムスヒ系神話群＝国譲り～天孫降臨～海神宮訪問神話
 - ・タカミムスヒ系のテーマ
 - …天上世界を権威の根源とする王権による地上世界の支配の正統性
 - …初代天皇の出自
 - ・天武朝における王権神話の大変革
 - …王権最高神の交替：タカミムスヒからアマテラスへ
 - …王権神話の一元化：それまで別個に存在していた二系の神話群をアマテラスを主神として一系化
 - ⇒記紀神話体系の成立
 - ・溝口説に従えば天孫降臨神話はタカミムスヒ系の神話
 - 記紀の同神話におけるアマテラスに関わる部分は一系化にともなう改変の要素
 - ・同神話の原形…書紀本文のような、タカミムスヒがホノニギを天上から地上に降臨させるという単純素朴な内容
- ☆それがどのように改変されたのであろうか

(2)古事記の天孫降臨神話の構成

- 古事記の天孫降臨神話において、一元化がどのように行われているか
- ・古事記の天孫降臨神話の構成
 - (Ⅰ) ホノニギの誕生と神勅
 - (Ⅱ) サルタヒコ、天の八衢に出現
 - (Ⅲ) 御魂の鏡の伊勢への降臨
 - (Ⅳ) ホノニギの日向降臨

(V) アメノウズメとサルタヒコ

(I) ホノニギの誕生と神勅

- ・当初アマテラスの子オシホミミが天降ることになっていた
- ・しかし準備している時、タカギの神（タカミムスヒ）の女子とオシホミミとの間にホノニギが誕生
- ・ホノニギに地上支配を命じる神勅を与えて降臨させる

○どのように改変されているか

- ・原形：タカミムスヒが子ホノニギを降臨させる神話
- ・全体の主神をアマテラスとし、降臨するホノニギを、アマテラスの子オシホミミとタカギ（タカミムスヒ）の女子との間の子、すなわちアマテラスの孫と改変

(II) サルタヒコ、天の八衢に出現…先に引用した部分

- ・要旨は先述
→サルタヒコは天つ神の御子の御前に奉仕するために参向したと称し、ホノニギの先導役のような印象を受けるが、果たしてそうか？

(III) 御魂の鏡の伊勢への降臨

- ①アメノコヤネ・フトダマ・アメノウズメ・イシゴリドメ・タマノオヤの「五つの伴緒」も天降された
- ②八尺の勾玉・鏡と草なぎの剣、それにオモイガネ神・タヂカラオ神・アメノイワトワケ神を副えて、「この鏡を、我が（アマテラスの）御魂として齋き祭れ」と命じ、「オモイガネは『前事』を取り持って政をせよ」と命じた
- ③御魂の鏡とオモイガネを五十鈴宮に祭り、トユウケ神を度会に、アメノイワトワケを御門に、タヂカラオ神を佐那々県に祭った
- ④①の「五つの伴緒」後裔氏族

・①の「五つの伴緒」の神、②のオモイガネ以下三神…天石屋戸神話で活躍する神々

・②の勾玉・鏡…天石屋からアマテラスを引き出すために作られたもので

⇒この部分はアマテラス系の天石屋戸神話の内容を受けている

⇒天石屋に籠って諸神の祭祀・タマフリにより霊威を回復したアマテラスの御魂が鏡に移され、それを天降して五十鈴宮に祭ったという伊勢神宮内宮の起源を物語る

＝伊勢神宮の祭祀起源神話

☆この部分はホノニギの天孫降臨とは全く関係ない、アマテラスを主神とする一系化のための改変・付加

○サルタヒコについて

- ・サルタヒコ…伊勢の地方神

- ・サルタヒコの役割…(Ⅲ)がアマテラスの御魂の鏡の天降りであり、その目的地が伊勢、とすると、アマテラスの御魂を伊勢の五十鈴宮に導くことにあった

(Ⅳ) ホノニギの日向降臨

故爾くして天津日子番能邇邇藝命に詔ひて、天の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたたして、筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐しき。故爾くして、天忍日命・天津久米命の二人、天の石鞞を取り負ひ、頭椎の大刀を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の眞鹿兒矢を手挟み、御前に立ちて仕へ奉りき。故、其の天忍日命〈此は大伴連等の祖ぞ〉・天津久米命〈此は久米直等の祖ぞ〉。

- ・ホノニギが「天の石位」を離れて、筑紫の高千穂の久士布流多氣に天降る
- ・この時大伴氏祖神のアメノオシヒと久米氏祖神のアマツクメが武具を持って御前に奉仕した

☆天孫降臨の本来の要素

(Ⅴ) アメノウズメとサルタヒコ

- ・役目を終えたサルタヒコをアメノウズメに送らせる
→サルタヒコの坐す地…阿耶訶（あざか、伊勢国壺志郡、現松阪市）
- ・サルタヒコ、阿耶訶で漁をしているとき溺れる
- ・志摩国の海産物を天皇の御膳にとどける「島の速贄」の起源とアメノウズメ後裔の猿女氏もそれを給わる由来

☆この部分はⅡⅢに付随するとみられる

(3)王権神話の一元化と「天の八衢」の成立

○古事記の天孫降臨神話

- ・タカミムスヒ系のホノニギの降臨の神話の枠組みに、アマテラス系の天石屋戸神話の要素が組み込まれている
- ・ホノニギの日向降臨とは別に、アマテラスの御魂を遷した鏡が伊勢に降ろされて祭られたとする伊勢神宮の祭祀起源神話も物語られている。

⇒以上を踏まえて、「天の八衢」について考えてみたい

○「天の八衢」の成立

- ・天孫降臨神話の原形…ホノニギが天上世界から地上の日向高千穂に天降る
→天上から日向への道は一本の道だけ
- ・アマテラス系との一系化の改変で、ホノニギの降臨の前にアマテラスの御魂の鏡が伊勢へ降臨する物語が挿入される
→その改変の中で、天上世界から地上世界へ向かう道の途中に、日向へ向かう道と、伊

勢へ向かう道の分岐点＝チマタが設定される ★そのチマタこそが「天の八衢」

- ・このチマタにサルタヒコがいた理由…ホノニギを日向に導くためではなく、アマテラスの御魂を伊勢に導くため

→チマタ…道案内が必要な場

⇒アマテラスの御魂の伊勢への降臨を、伊勢の在地神サルタヒコが誘導した

☆天孫降臨神話における「天の八衢」は、本来タカミムスヒ系であった同神話がアマテラス系と一元化されることによって成立した

○「天の八衢」と岐神

- ・日向と伊勢だけでは二俣…八衢には物足りない
- ・天上から地上へ天降る神…タケミカツチ・フツヌシ→出雲へ
ニギハヤヒ→天の磐船で大和

→多くの神が葦原中国の各所に到達

⇒記紀の神話的世界観において、天上から地上に向かう道は、最初是一本の道だったが、途中に葦原中国の各所に分岐する地点…そこが「天の八衢」と称されたのであろう

- ・書紀第9段一書②（国譲り）…オオナムチの服属後、フツヌシは「岐神（ふなとのかみ）」の導きで国土平定

…なぜ「岐神」が導くのか？

→「岐神」＝「天の八衢」の神ではないか…天上から地上のどこでも案内できる

おわりに

- ・記紀神話研究における「作品論」的立場と「成立論」的立場
…作品論：記紀それぞれを完成した一つの作品とし全体のテーマを踏まえて部分を解釈
成立論：記紀神話の形成過程を踏まえて部分を解釈

☆本報告は成立論

【参考文献】

菊地照夫「スサノオ神話の形成に関する一考察」（『出雲古代史研究』31、2021年）

前田晴人『日本古代の道と衢』（吉川弘文館、1996年）

溝口睦子『王権神話の二元構造』（吉川弘文館、2000年）

付論：勝俣隆氏の「天の八衢」の理解をめぐって

- ・勝俣隆『星座で読み解く日本神話』（大修館出版、2000年）
…日本古代の神話と星座の関係を本格的に論じた貴重な成果

○勝俣の記紀神話、日本神話の理解

- ・記紀神話…星への関心が薄い、日神・月神は登場するが…
- ・しかし民間伝承に多くの星の伝承、農民・漁民の活動と星との関係

- ・「記紀神話＝日本神話」ではない
 - 残存するのは切り貼り細工の一部の神話にすぎない
 - 失われた神話を含めてすべてを日本神話
 - ・風土記、万葉集、祝詞など古代史料の断片から神話を探る
- 「第十章 古代日本人の宇宙観」をめぐって
- ・播磨国風土記、延喜式祈年祭祝詞、万葉集 420 番歌、丹後国風土記逸文をてがかりに、ドーム状の天の層で天上世界と地上世界が分離される古代日本人の宇宙観を復元（資料：勝俣①）
 - アルタイ系諸民族の宇宙観と共通
 - ・古事記のアメワカヒコ神話をてがかりに、天の層の穴が天と地の通路
 - 天の層に開いた穴が星…星の古語：ツツ＝筒（細長い中空の穴）
- 「第十一章 天の八衢と天の石屋戸」をめぐって
- ・天と地の通路として「天の八衢」に注目、これを復元した宇宙観で理解
 - ・「天の八衢」…天の層に通路として穴が多数開いているところ
 - ⇒すばる（昴星、プレアデス）と理解
 - ・「天の八衢」の模式図を提示（資料：勝俣②）
 - ・「天の石屋戸」もすばるに比定
- 勝俣のサルタヒコ、アメノウズメの理解
- ・「天の八衢」をすばるとすると、その近くにサルタヒコがいるはず
 - アルデバランを眼としヒアデス星団（畢星）をサルタヒコの顔に比定
 - 長い鼻のサルタヒコの顔の図像を復元（資料：勝俣③）
 - ・さらにオリオン座をアメノウズメに比定
 - ウズメの帯：三ツ星、帯の垂れた部分：小三ツ星
 - 西洋のオリオン座の図像に基づいてアメノウズメの図像を復元（資料：勝俣③）
- ⇒天石屋戸神話、天孫降臨神話を星辰神話として理解
- 勝俣説の評価と問題点
- ・「第十章 古代日本人の宇宙観」は高く評価できる
 - 復元された宇宙観、世界観が日本古代にあったことは認められる
 - ・しかしそれが記紀神話の宇宙観、世界観と一致するかどうかは検証されていない
 - ・ところがそれに基づいて記紀神話を部分的に解釈
 - 「天の八衢」をすばるとする説が提示されたあと、強引な記紀神話の解釈
 - ・「天の八衢」…本報告で明らかにしたように王権神話の一元化で成立
 - 固有の宇宙観に伴う要素ではない